
死にゆく薔

他界

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死にゆく蕾

【Nコード】

N1412A

【作者名】

他界

【あらすじ】

ドン。あまりにあっけない音と衝撃が体を走って、車に轢かれたことを他人事のように思いながら、大河は死んだ。

ドン。あまりにあっけない音と衝撃が体を走って、車に轢かれたことを他人事のように思いながら、大河は死んだ。

目を開くと、目の前に倒れている自分を見つけた。

これが臨死体験って奴か、と他人事のように彼は思った。自分が目の前に倒れている。それとは別の場所から自分を眺めている自分は、手や足がまったくない。幽霊だから体はないんだろっ、と彼は妙に納得できた。

肉体のほうからは、血がどくどくと溢れている。右肘と腰があらぬ方向に振れていて、額は割れて頭蓋骨が覗いている。だというのに霊体の彼には痛みはまったくないかった。それどころか肉体があったときの重力に縛られている感覚もなく、今ならどこへでも飛んでいけそうな気がする。

「ほう、珍しいな」

どこからか声が聞こえた。その辺りを見てみると、沢山の人が彼の死体を取り囲み、なにやら話し合っているが、それはすぐ近くのことなのにやけに遠くのように聞こえて、はつきりと聞き取ることが出来ない。

はつきりと聞こえてきた声は、彼の頭上から聞こえてきていた。見上げると、青いレースの天国が降ってきた。否、青いレースの下着をはいた女性が降ってきた。

やたら宗教がかったローブのような、初夏には暑そうな格好だが、女性は汗一つ浮かべていない無表情だった。背中から白い羽を生やしている姿は、まるで天使のようだった。本物かもしれない。

「ふむ…… 本山大河、男性、二十歳、建設会社の現場作業員で、住

所は死に場所近辺の安アパート、趣味は高校時代から始めたラグビーで、特技はパチンコで当たりやすい台を見つけること、彼女とは二年前に互いに潔い別れ方をしている……」

女性は持っていた謎の書類を眺めて呟いた。それは彼に対する確認なのか、それとも独り言なのか、どちらとも言い難い口調だった。「ふむ。中の上くらいの平穏な人生だな。未練はいくつもありそうだが、特に強い思い入れもなさそうだ。何が君をそんなに現世の思いとどまらせているんだ？」

彼は質問の代わりに質問を返した。

「お前……ストーリーか？」

「失礼な！ 誰が好き好んで貴様など付け回すか！」

無表情を崩した激昂した女性は、しかし五秒後には表情を整えて再び無表情になる。

「……コホン。あー、私は天界で死者の案内役をしているものだ。

特に名前はないが、人間からは天使と呼ばれている」

「もしかして、電波？」

「違うといっているだろうが！ シメるぞこら！」

再度激昂する女性。無表情を取り繕うとするが、あまり上手くできていない。もしかしたら気が短いのもかもしれない。一度彼に背を向けて深呼吸してから、顔をぱしんと軽くはたいて彼に向き直る。

「今更無表情を貼り付けてもなあ」

「うるさいな！ 大人しく話を聞け！」

うるさいのはお前だろう、とは彼は言わないでおいた。

「……コホン。あー、君は車に撥ねられて死亡した。本来なら自動的に天界へと召されるのだが……どういうわけか君はそれを拒んでいるようだ。魂だけが肉体を離れてなお現世に留まろうとしている」

「まあ仮に信じてやると想定して話を進めるとしよう」

「信じるも何も真実だ。しかも妙にえらそうだな」

お前ほどじゃない、とも言わないでおいた。

しかし死んでいるという話は、彼も納得するところがある。目の

前に自分が死んでいた。もう救急車で運ばれてしまったが、あれは即死だった。治療も何もなく死体安置所へ直行だろう。

だが彼はここにいる。本当なら死んだら天界なる場所へ行くはずが、ここに留まっている。天使を名乗る女性は、彼のような魂を天界に導くのが仕事なのだろう。

「君を現世に繋ぎとめているのはなんだ？」

「答えたら生き返らせてくれるのか？」

「いや、私が興味があるだけだ」

「……おい」

「まあいいではないか。君のようなケースは珍しいんだ。非の打ち所がない人生、というほどでもないが、天命に逆らってまで死を拒む理由が、君の人生には見つからない」

それは確かにそうだった。特に目立つでもなく、とりわけ地味なわけでもなく、彼はごくごく普通に生きてきた。きっとこれから生きていても、平凡な人生しか歩めなかっただろう。

「だから、さ」

「？」

「平凡に生きて、死んでも死に切れないほど上を目指したわけでもないし、いくら悔やんでも足りないほどの失敗をしたわけでもない。たぶん生き返っても、そんな人生を続けるだけだろう」

「そうだろうな」

「だからこそ、死ぬときくらい、誰にも負けないくらい派手に逝きたいんだよ。こう、原子炉に飛び込んで自爆するとか、単身大気圏離脱に挑戦して焼け死ぬとか、マシンガンぶち込みながらホワイトハウスに突撃して返り討ちとか！」

「無茶ばかりいわないでくれ。っていうか三番目は派手か？」

「少なくとも何の変哲もない交通事故よりは派手だ」

「まあ言わんとするところはわかった」

天使は頷いてから、どこからか錫杖を取り出した。どこから取り出したんだ、とは問いかけても無駄だろう。どうせ天使だし、物理

法則とは別の次元にいる存在だ。

その錫杖を彼に向けてかざす。魂だけの彼だが、天使にははつきりと見えているようだ。ちゃりん、と錫杖が音を立てた。

彼はよくわからないところにいた。暗くて寒い場所。これが死後の世界か、と思ったが、どうやら違うようだ。数多の星が見え、月が近くに見える。宇宙だ。

彼は宇宙服を着ていた。いつ着たのか定かではない。というよりも宇宙にいつの間に来たのかもわからなかったが、まあ死んだ命だ、どうなるうと不思議ではない。

しかし気になるのが、背後にある地球がどんどん近づいていることだった。重力に惹かれていのか、慣性がなくならないのか、よくわからなかったが、とりあえず危険なことは分かった。

宇宙服が赤熱する。重力の腕に捕まったのがわかった。服の中の温度が急激に上がっていく。

これが大気圏突入というもののだろう。などと思いながら、彼の肉体は破裂した。直後宇宙服も破裂し、焼けてなくなる。

あまりにもあっけなく彼は死んでしまった。

「どうだ、満足できたか？」

目の前には天使が浮いていた。それは彼が交通事故で死んだ場所で、宇宙からは大分遠い。

「まあ私の力で勝手に人を生き返らせることはできないからし、現世に干渉するのも無理だからな。幻覚で疑似体験してもらった」

「うーん、まだ物足りないが、まあこんなもんだろ。うな。ありがとう」

とりあえず彼は礼を言った。幻覚ではあるが、望みは叶ったわけだ。

だが天使は難しい顔をした。

「……わからないな。どんな死に方だろうが、死んでしまえばそれだけだろうに」

「お前がそれを言うか？」

「死んでしまえば、あとは天界に行って、転生して違う人間になる。今までの人生をゼロに戻してしまうことだ。どんな死に方でも、結局何も変わらない」

「どんな死に方でも変わらないかもしれないが、俺は満足できた。ならそれでいいじゃないか」

「……そういうものか？」

納得したのかしないのか。天使は頭を振って考えを払った。無表情を取り繕って大河を見つめる。

「まあ満足したなら成仏したまえ。大人しく私と天界に来るか、あくまで現世に留まるか、選ぶがいい」

「現世に留まるとどうなるんだ？」

「私が成敗する。出来れば私もそんなことはしたくないんだ」と、悲しげな表情を浮かべる天使。

「……面倒じゃないか」

「一言余計だ。……けどまあ、別にもう心残りもないし、大人しく天界にいくとしよう」

「そうか。では付いて来い」

天使は空へと浮き上がっていく。背中の羽は羽ばたかせないので、羽の浮力とは別の力で浮いているのかもしれない。だとしたら羽はすぐく無駄なんじゃないだろうか。

どうやって付いていけばいいのかわからなかったが、彼は後を追おうとした。浮き上がる感覚が彼を包み込み、どんどんと地表を離れていく。

地表を離れるほどに、どんどん意識が薄れていく。これが死ぬっ

てことなのかな、と朦朧と思いながら、
……本山大河は消えた。

天使は虚空に向けて小さく呟いた。
「……お前は満足できたのか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1412a/>

死にゆく薔

2010年10月8日15時21分発行